

か。元より自分は斯かる方法が最上とは考へない。徳の爲の徳、義務の爲の義務てふ理想境に達する迄は、賞罰が徳育の手段として用ゐらるゝ如く、或程度迄斯かる手段を取りて理會を助くるも敢て差支へないと信ず。此稿を草した所以も又此處にある。猶、教授の時期、科目に關しデビス氏が青年期は情緒の發達期であり、此の時代になされた印象は永久的となり後年の活働の基礎となるから公民たるの責任の感を養ひ且つ音楽を奨励してそれに資せよと説いておる(九)のは一考に値するものと思ふから附記して置く、

- (一) Hall, S. Educational Reform. Vol. II. P. 672.
- (二) Judd, C. H. The Teaching of Civics. The School Review. Vol. 26. P. 518.
- (三) Ibid. P. 511 ff.
- (四) The Teaching of Community Civics. United States Bureau of Education. Bulletin, 1915, No. 22.
- (五) School and Society Vol 9. P. 781.
- (六) Judd, C. H. P. 524 ff.
- (七) University Training for Public Service. Department of The Interior. Bureau of Education. Bulletin, 1916, No. 30.
- (八) Kirtrell, C. A. An Important Factor in Teaching Citizen

學界近況

ship. The School Review. Vol. XXIX May, 1921. P. 366 ff.

- (九) Davis, C. O. Citizenship and the High School. Educational Review March 1921. P. 214 ff.
- (十) Dunn, Arthur W. Civic Education in Elementary Schools as illustrated in Indianapolis. United States Bureau of Education. Bulletin, 1915, No. 17.

學界近況

ジョーチ・トラムフル・ラッド逝く

新聞紙の報導する處に由れば八月初旬に米國の心理學者哲學者として著名なるラッド教授が病氣のため長逝せられたるの事である。氏は吾國の學界に早く知られその教育學心理學認識論もその頃翻譯解説せられたやうである。一八九二年には同志社大學に一八九九年には創立當時の京都帝國大學のために講義せられたことは京都の學界にきつて忘れ得ぬ學者である。氏は一八四二年に北米マインツェルに生れ Bowdoin college の教授として生理的實驗的心理學の研究に従事し、後エール大學の教授に移つてからも氏の實驗室に於て研究を続け、それを纏めて公にせられたものが世に知られたる「生理的心理學」である。此書は英米の心理學界に相當の影響を及ぼしたやうである。哲學に於て氏はヘルムン・ロツェの流を汲み一方に於て批判的態度をさるる共に、他方に於ては經驗的事實に由つて思辯を補正せんとする實證的態度をも輕ん

じなつた。即ち氏の學風は獨創的なもの類似的なものも藏する
と云ふよりは寧ろ種々なる立場を參酌し極めて圓滿的にこれ等を
統一し實生活と接觸して、民衆の理解に力めんとするにあつた。哲
學を以てその子としての實證科學の急激なる發達を眺めて唯徒ら
に驚愕してゐる母親、もはやその子に見放され自らの昔の盛を徒
らに嘆くに過ぎない母親にも比せんとする様な、一部の論者の主
眼には明かに反對して、哲學はそれ自身の獨立の立場に立つて一
すべての特殊科學が無批判的に使用してゐる範疇そのものを批判
すること(二)すべてがそれが無自覺的にある探求の目的理想等の批
判及び(三)特殊科學の成果の綜合に對しての批判を試みる點に、他
の科學と區別せらるべき使命ありとしたが、他方に於て哲學は精
神科學就中心心理學の實際的研究に由つて新しき内容を惠まれその
問題の起源と解決を此等の學に負はねばならぬと述べてゐる。か
くの如き理想と事實の相關は自ら氏を二元的唯心論に導いたので
あつたが、然しこの對立は神の概念に於て一致すること、即ち宗教
の一元論に於て最後の目的統一の成立することをも明かにした。
すべての實在はヘーゲルの向自的實在を以て精神的であり、無限
的精神としての神の中に含まれる、吾等個々の精神も勿論その中
に於て統一せられるのである。心理學に於ては發達の方面意志活
動の方面を特に重じた様であつた、認識の要素は情意の作用であ
つて、それは認識に倫理の意味を帯びしめる。身心の關係につい
ては交互作用説をなつた。その晩年の著書 *Knowledge, Life and
Reality* の中では吾が日本の哲學について次の様に述べてゐる。
「日本に於ては西洋思想の輸入は別として、その哲學は佛教各宗

派の間に於ける汎神論的教理の環末的論争か若しくばその國の封
建制度の要求に基く儒教の著るしき發達の孰れかに存する云々」
その主なる著書は

- Elements of Physiological Psychology*, 1887.
- Introduction to philosophy*, 1890.
- Psychology, Descriptive and Explanatory*, 1895.
- Philosophy of Knowledge*, 1897.
- A Theory of Reality*, 1899.
- Philosophy of Conduct*, 1902.
- Philosophy of Religion*, 2 vols, 1906.
- Knowledge, Life and Reality*, 1909.

ウイタセクの計

プラーゲ大學教授として知られたステ
ファン・ウイタセクも亡くなられたさうである。氏は一八七〇年の
生れ、マイニング學派の少壯心理學者としてその好著 *Grundzüge
der allg. Aesthetik*, 1904 及び *Grundlinien der Psychologie*, 1908
等に山つて將來を期待されたのであるが、1910 年後は餘り著るし
き發表を見なかつた様である。然し三十歳頃の著作たる

- Zur psychologischen Analyse der ästhetischen
Einfühlung* (Zf. Psych. n. 35, 1901).

の如きはリップスの感情移入論に對する一種の批判としてその方
面の研究者の見逃すべからざるものであらう。マイニング逝きス
トエール逝きまた氏の計あつて填國派の孤影寂然たるの感がある。